

ビーだま

ビーだまのように、キラリと光る一冊を

2015年1月～6月に図書館に入った本の中から、とくにおすすめの本を紹介します

<編集・発行> 富山市立図書館 富山市西町5番1号
電話 076-461-3200
平成27年10月27日発行（年2回発行）

コービーの海

ベン・マイケルセン／作 代田亜香子／訳 鈴木出版



事故で右足をなくしたコービーは、海が大好き。それは海にいるとなやみを忘れることができるからです。

ある時、親子クジラが浅瀬に打ち上げられているのを見つけたコービーは、一晩中クジラをささえて、命を救います。それはコービーが出産を助けたクジラでした。

クジラと気持ちに通じるコービーは、名誉隊員として、海洋保護チームに加わることになりました。

トルネード！ たつまきとともに来た犬

ベッツィ・バイアーズ／作 もりうちすみこ／訳 学研教育出版



大きなたつまきがピートの家の庭に、見たことのない犬いぬ小屋をはこんできました。中をのぞくと、そこには大きな黒い犬がいて、ガタガタとふるえていました。

飼い主が見つかるまで犬をあずかることになり、ピートは、「トルネード」と名前をつけます。ピートは、さんぽをしたり、手品てじなをおしえたりしてかわいがります。



つばさ

大島理恵／作・絵 文研出版

翼つばさは、商店街の歩道でツバメのひなを拾います。小さくてあたたかい体と瞳ひとみの力強さにひかれた翼は、ツバメを飼うことを決心します。

翼は、はりきってツバメを家に連れ帰りますが、えさが何かもわかりません。こまっていると、クラスで一番動物にくわしい博が、翼の家にやってきました。



ねこの風づくり工場

みずのよしえ／作 いづのかじ／絵 偕成社



町はずれに、風をつくる工場があります。そこでは、たくさんのねこがはたらいていました。

ある日、灰色ねこのブラリは工場の研究室で〈わらい声のかけら〉を見つけました。こっそり食べてみると、ブラリの体がかってに動きだし、いたずらをはじめます。それは、町一番のいたずらっこの口から出たわらい声のかけらだったのです。

風のヒルクライム ぼくらの自転車ロードレース

加部鈴子／作 岩崎書店



涼太は、誕生日に父さんからロードバイクをもらいます。しかし、仕事でめったに帰ってこない父さんに、ほしくもないものをもらった涼太はおもしろくありません。

そのうえ、父さんはかつてにレースの申しこみまでしていました。怒った涼太は、「完走したら、父さんが何でも言うことを聞く」ことを約束し、レースに出ることしました。

* ヒルクライム…山道や丘の上り坂を走る速さを競うレース。



みずがめ座流星群の夏

杉本りえ／作 佐竹美保／絵 ポプラ社

花には、幽霊のおじいちゃんと話ができるという秘密があります。ある日、花は同じクラスの莉子が、病気の兄のお見まいに行くところを見かけました。莉子が気になる花は、おじいちゃんに勇気をもらい、思い切って話しかけます。仲よくなった二人は、莉子の兄が教えてくれたみずがめ座流星群をいっしょに見ようと約束しました。



さくらいろの季節

蒼沼洋人／著 ポプラ社



幼いころは仲よしで、桜の木のまわりでいっしょにはしゃだ理奈と優希とめぐみ。しかし、6年生になった現在、3人の関係は変わっていました。

クラスのリーダー的存在の、理奈。クラスのみんなは、理奈に逆らえません。めぐみと優希も、理奈をこわがるようになっていました。

スモークー山脈さんみやくからの手紙

バーバラ・オコーナー／作　こだまともこ／訳　評論社



夫を亡くしたアギーは、スモークー山脈にある古ぼけたホテルを売ることを決め、新聞に広告を出します。

そこへ3組の家族が泊まりにきました。母が家をでたことを悲しむウィロウ、家族と仲のよくないカービー、生みの母がどんな人か知りたいロレッタ。ぐうぜん出会った3人の子どもたちとアギーが心を通わせます。

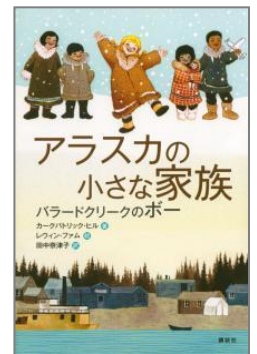


アラスカの小さな家族　バラードクリークのボー

カークパトリック・ヒル／著　レウィン・ファム／絵　田中奈津子／訳　講談社

ボーは、自然豊かな町、バラードクリークに住む元気な女の子です。母さんはいませんが、父さんはなんと、二人もいます。二人とも血のつながりはありませんが、ボーを本当の子どものように、大切に育ててくれました。

ある冬の日、ボーは親のいない小さな男の子と出会います。男の子は、ボーが話しかけても何も答えてくれません。



庭をつくろう！（えほん）

ゲルダ・ミュラー／作　ふしみみさを／訳　あすなろ書房



春、バンジャマンたちが引っこした新しい家には、とても大きな庭がありました。ずっと手入れがされていない庭は、まるでジャングルのように。

家族は町一番のきれいな庭を目指して、庭づくりをはじめます。ある日、庭に野菜の種をまこうとしていると、車いすにのった男の子が声をかけてきました。

【 執筆：清水（八尾図書館） 】